

Smile More プロジェクト

「認知症予防アプリすもあ」で誰もが認知症予防を行う八王子へ

Team ACT

齋藤彩音、西村秀美、中元慎悟、澤田裕介、下園未来、寺田美咲、安川信成

指導教員 安田賢憲

創価大学経営学部経営学科 安田ゼミナール

キーワード：認知症予防・フィンガー研究・ビジネスモデル・シニア・スマホアプリ

1. はじめに

私たちの目的は「認知症の予防を多くの人が行うことで認知症の与える社会的影響を減らすこと」である。認知症は本人の戸惑い、その介護だけではなく、社会でも認知症患者の徘徊による行方不明、事故などその影響は計り知れない。発症してしまうと完治が難しい認知症だが、予防をすることで発症を防ぐことができると言われている。私たちは祖父が認知症を患い、自分のことを忘れられてしまったチームメンバーの体験から、このような思いをする人を増やしたくないと強く思い、認知症予防を広めるための施策を提案する。

2. 問題意識

認知症の社会的影響を減らすためには認知症患者そのものを減らすことが不可欠である。また認知症は完治が難しいことから、予防が重要である。ところが、実際に予防を行っている人は多くない。私たちの独自調査によると(50~70代への八王子市周辺での路上アンケート N=750)、回答者の殆どが、認知症が予防できることを知っていたものの、その内 68%の人が認知症予防を全く行っていなかった。その理由を尋ねた所、47%の人が「具体的な予防方法がわからないから」と回答した。

これらの方々にデプス・インタビュー調査を行った所、多くの人が認知症に罹患する不安を抱えており、TV 番組などで認知症予防に関する情報を入手し、取り組んだ経験があるものの、その情報を忘れてしまった、と回答した。このことから、

私たちは「認知症予防が習慣として定着していないこと」が問題であり、何らかの手段で「具体的な予防方法を提示し続けること」が認知症予防において重要だとの見解を持つに至った。

3. 提案

上記のような問題意識に基づき、私たちは「認知症予防アプリすもあ」を提案したい(図1)。これは、アプリ内キャラクターのすもあとの日常会話を通して認知症予防に有効とされる運動、脳トレ、食事に関するエクセサイズをサポートするアプリである。具体的に、運動ではウォーキング、体操、脳トレではオセロ、計算、漢字、パズル、食事では認知症予防に良いとされるレシピ、その人の食事内容に合わせたアドバイスを行う。なお、これらの内容は認知症予防に関するフィンガー研究に基づき作成し、日本体力医学会理事の田中先生に監修をしていただくことが決定している。

このアプリのターゲットは「具体的な予防方法がわからず予防を行っていない50~70代」である。

このアプリの開発にあたっては、認知症予防を個人の日々の生活に定着させるために、①パーソナライズ、②使いやすさの2点の特徴を備えることを目指す。第一に、各個人の属性、状況、予



アプリイメージ図

防履歴を踏まえ、使えば使うほどその人に合った予防方法を提案することを目指す。第二に、高齢者が操作しやすいように基本の操作は音声入力とし、加えて、アプリ内の Q&A を搭載するのはもちろん、希望者には紙媒体の説明書も用意し、スマートフォンに不慣れな方も安心して利用できるようにすることを目指す。

このアプリは利用者には無料で提供、さらにポイント制を設ける。ポイント制については毎日の予防活動やすもあとの会話を通してポイントを付与し、ある一定のポイントで旅行券や商品券を交換可能とする。これらの施策により、認知症予防に関心があるものの、行動できていない方にも広く利用してもらうことを目指す。

図2 ビジネスモデル図

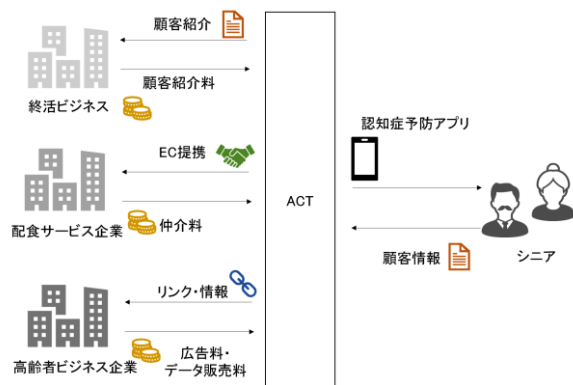


図2は私たちのビジネスモデルである。アプリは利用者に無料で提供する一方で、利用者の個人データを収集する。そして、①定期的に行うアンケートを行い、終活ビジネス企業の各種情報を利用者に提供（顧客斡旋）、②終活ビジネス企業にとって有用なマーケティングデータの提供、③配食サービス企業との提携（アプリ内の食事の機能と連携し、顧客斡旋）、④アプリ内広告掲載費、の4つの方法で収入を得ることを目指す。

4. 検証

私たちは、このアプリの開発の前に「具体的な予防方法を日々提示することが認知症予防の活動を誘発するのか」について検証する必要があると考え、モックアップとしてLINEを用いた chatbot を作成し、検証作業を行った。そのために NEC

に協力を仰ぎ、chatbot を開発、実験の協力者を募り、彼らに、①毎日予防の提案、②認知症に関する豆知識、を提供した（図3）。この chatbot を72名の方に使っていただいた所、今まで予防を行っていなかった36人中34人が継続して予防活動を行ったとの結果が出た。その理由を確認した所、一番多かったのが「すもあからの定期的な声かけがあったから（70.5%）」というものであった。このことから、私たちの提案には一定の有効性があると考えている。

図3 開発した chatbot



さらに私たちは「実験の協力者が予防活動をどの程度継続してくれたか」について検証した。その結果、この chatbot で1カ月間予防活動を継続できた人は11.9%であった。この割合を高めるために、利用を辞めてしまった人にその理由を尋ねた。すると、「自分に合わない」「脳トレのレベルが高い」「文字入力が得意ではないし使い方がわからなかった」という意見があった。そのため、引き続き、パーソナライズと使いやすさを向上させることは極めて重要であると考えている。

5. 今後の展望

私たちは、認知症予防を推進するためには、在学中に、このアプリの開発を実現したいと考えている。そのため、現在、田中先生にアドバイスを頂戴しながら、株式会社 Panasonic、株式会社 FinC とレベニューシェアを前提とした開発交渉を進めている。

その上で、開発が実現後、その運用にあたっては、同じく協力を頂いている NPO 法人こころとからだの介護予防協会、株式会社 THF と協力して実施していくことが決定している。